

第 29 回庭野平和賞贈呈理由

庭野平和賞委員会は第 29 回庭野平和賞を、勇敢な人権活動家で指導者であるロサリーナ・トゥユク・ベラスケス氏に贈呈することを決定した。先住民の宗教伝統（マヤ）の実践者による受賞は今回が初めて。ロサリーナ氏は、数十年にわたって未曾有の暴力と内戦にさらされたグアテマラに住み活動を続けている。グアテマラの先住民たちは、社会の中心から組織的に排除され、彼らの伝統宗教の知恵は無視されてきた。女性は性的暴力や経済的搾取などさまざまな形の暴力、人種主義や様々な差別の被害者である。しかし同時に、それらは彼女たちの力と立ち直りの源泉でもある。ロサリーナ氏は公正で差別のない未来と、平和を基盤とする新たな文化の構築に向けた道を示している。

ロサリーナ・トゥユク・ベラスケス氏は、グアテマラのチマルテナンゴ県、サン・ファン・コマラパの、農業と手工芸を生業とする信仰に篤い家庭に生まれた。彼女の生活は、古来の宗教伝統であるマヤの霊性に常に導かれ、また彼女は幼い頃からキリスト教の活動に参加していた。いくつかの女性団体に所属していた彼女は、手工芸・農業・畜産の協同組合のメンバーであり、最初の職業として彼女が選んだのは、キリスト教の教師と看護助手の道であった。

1960 年から 1996 年まで、グアテマラは長期にわたる悲惨な内戦を経験し、今日でもなお世界中で最も暴力に満ちた国のひとつに数えられる。約 1,000 万人の国民のうち、25 万人を超える人びとが内戦で命を落とし、45,000 人以上が行方不明のままである。5 万人以上の女性が夫を内戦で失い、24 万人以上が孤児となった。グアテマラ国内では 150 万人以上が国内避難民となり、10 万人を超える人びとが難民となってメキシコやカナダ、米国あるいはヨーロッパへと逃れた。グアテマラの本来の住民でありながら、長年にわたって差別を受け続けたマヤ民族は、グアテマラ国民のなかで最大の被害者であった。ロサリーナ氏も国内避難民であった。1982 年 6 月、彼女の父親、フランシスコ・ハビエル・トゥユクはグアテマラ軍によって拉致されて行方不明となった。その 3 年後には彼女の夫であるロランド・ゴメスも同じ運命をたどった。彼女は絶望を乗り越え、以後、政府に過去の事実を認めさせ、マヤ民族とグアテマラの社会正義のために闘ってきた。

1988 年、ロサリーナ・トゥユク・ベラスケス氏は他の女性たちと共に「連れ合いを奪われた女性たちの会」（コナビグア）を設立。コナビグアは、現在グアテマラの主要な人権団体であり、非暴力平和運動の新たな形を活発に作り出しているパイオニアである。コナビグアは暴力との闘いの象徴であり、暴力へのマヤ民族の抵抗の象徴である。1985 年に内戦で夫を亡くした女性たちの小さなグループが始めた活動がその設立のきっかけとなった。コナビグアはその後、全国組織へと発展し、女性が完全に平等な社会的地位を獲得するための

活動や人権尊重に力を注ぎ、グアテマラの軍事優先的な気風や統治方式の見直しを行なっている。

コナビグアの活動を通し、300の地域グループに所属する1万人を超える女性たちは、女性に対するすべての性的な暴力に対し、また準軍事的な組織が刑罰を免れていることに対し非難の声を挙げた。彼女たちは、秘密にされてきた虐殺犠牲者の埋葬地を探し出し、もつとも残酷な虐殺が行われた場所で遺体の発掘を開始し、強制的な徴兵の犠牲となっていた数多くの青年たちの解放を実現した。

コナビグアは、1996年にグアテマラの和平合意が調印された後、特に犠牲者に対する誠実な対応と賠償金の問題に関連して、合意文書が順守され実施されるよう関心を向けさせ、また女性の尊厳の尊重と農村地域の開発を強く要求した。ロサリーナ氏は国会議員や「第1回グアテマラ女性良心法廷」の良心判事など、国と地域で多くの役職を果たしている。彼女は活発な市民組織の活動を通し、また政治リーダーとして常に傑出した存在であり、グアテマラをはじめラテン・アメリカ全地域の人々の尊敬を集めている。

マヤの教えに基づき、また共に活動することで、人種主義と差別の犠牲者が力を身につけ、人権侵害を打破し、自分たちを深く傷つけてきた原因を変化させることが可能になる——ロサリーナ氏はそれを実証し、人々に感銘を与えた。彼女は、グアテマラの長期にわたる内戦を終結に導き、国に平和と正義をもたらすための建設的で平和な手段を開発し育成するために力を尽くす。彼女は、ある一地域の先住民の人々に深く根付いた霊性がグローバルな規模においても重要性を持ち得るものであること示すとともに、他の宗教のもっとも洗練された要素と共鳴する価値がそこに存在することを実証したのである。

ロサリーナ氏は、さらに、市民社会におけるリーダーシップの性質の変容と、その成長している力の具体例である。「市民社会の異なるセクター間で合意を形成するプロセスや、彼らからの提言は、むしろ交渉当事者を拘束する力を持つものではない。しかし国が抱えるさまざまな課題に取り組もうとする限り、交渉当事者たちは、市民社会の視点や、彼らの要求や提言を理解する必要があると私は常々考えている。それは決して簡単なことではなく、関係者に話を聞いてもらい考慮に入れてもらうために、我々は時に、交渉のテーブルに直接おもむくことも必要である」と彼女が言うように、無力な被害者と見られていた人々のグループが、対話の性格を変え、プロセスを変え、結果を変えられることを彼女は示しているのである。

ロサリーナ氏の仕事を知ることで、マヤ民族のビジョンの内側に宿る霊性の本質とそのグローバルな意味を理解することが可能となる。マヤ民族に古くから伝わる固有のビジョン

が求めているのは、人と自然との間の調和を大切にし、暴力と破壊を拒否することである。そこに見えてくるのは、食べ物や水や酸素など、我が身に受けたものに感謝し、創造の営みに報謝しようとする互惠の関係である。マヤ民族にとって、その霊的な活動の軸となるのは公共善であり、自分たち人間と母なる大地や水、空気、そして火との関係を敬い強化していくことである。マヤ民族の宇宙観では、すべての信仰とこの世のあらゆる存在が敬意の対象となっている。マヤ民族のカクチケル語で「平和」はウツツ・カスレマルというが、それは「周りのあらゆるものと調和しバランスを大切に正しく暮らす」という意味である。社会、文化、経済、そして政治における充足から生じるのが平和であり、平和がこの充足をもたらす。平和は活動することで獲得され、人間と自然の両方の公共善に向けた心と献身を通して育っていく。カクチケル語で「争い」を意味するオヨワルという言葉は、相手を尊重せず攻撃することを意味する。

ロサリーナ氏は、マヤの人間としてグアテマラで生きるということは、高齢者や精神的な導きへの無理解、不寛容、迫害に立ち向かい、「我々の本質、我々の実践、そして我々の問題解決の方法」への挑戦に立ち向かうことである、と主張する。だからこそ「マヤ民族の人間にとって最も根本的な目標は、真の自分のすがたを子孫に遺すこと」なのである。「対立した状況のなかにあってマヤ民族であることは、もっとも深い次元において行動する調停者としての存在を意味する。それは自然界の調和とバランスを回復する一助となるために、個人としてあらゆる努力をすることである。」マヤ民族は、紛争解決は対話、尊敬、参画を通して実現すると考える。紛争解決とは、責任の受容、賠償、そして再び攻撃をしないという約束である。家族の諍いにおいては、諍いをやめることを約束し、二度と相手を傷つけない約束を交わすための証人として、両親と父方母方の祖父母が解決に加わる。なぜ、いかにして諍いが生じたのかを明らかにせず、また加害者が再び危害を加えないことを約束しない限り、和解は得られない。

庭野平和賞は、平和に向けたロサリーナ氏の卓越した不屈の取り組みを顕彰する。彼女は先住民の人々や、彼らの智慧が平和への道を指し示す大きな可能性を秘めていることを実証している。彼女は平和に向けて活動する女性が担っている大きな役割と、平和にアプローチする強固な信念と決意を明らかに示した。そのアプローチと活動は、ラテン・アメリカをはじめ世界の諸大陸の先住民文化に受け継がれ、幅広く霊的な共鳴力を備えた価値に光を当てている。

智慧と平和への道を探求するなかで、ロサリーナ氏が果たしてきた人類への奉仕に対し、ここに庭野平和賞を贈りその榮譽を称える。